岩見沢東高等学校　男子テニス部通信　　２０１５．５．１２．

Ganto Tennis　第５８号

文責：佐々木雄介

respect　・・・　尊敬する

アメリカ人はよく「尊敬」という言葉を使う。平気で、妻を尊敬したり、友や同僚を尊敬したりする。聞いている私はちょっと恥ずかしい気持ちになって、俺は友や妻を尊敬しているだろうか、などと考えてしまう。しかし実際には、彼らは日本語で「私は彼を尊敬している」と言ったわけではなく、「I respect him.」と言っただけなのだ。

そんなことを考えながら、英語の respect リスペクトは、日本語の「尊敬する」とは意味が違うんじゃないのかと疑ったりもする。

国語辞典で「尊敬」は「その人の人格・識見・業績・行為などをすぐれたものとして尊び敬うこと」とある。もちろん私だってそのような意味で「尊敬」する友人がいないわけではないけれど、多くの友人に対する私の思いは、それとは全く別のものである。

ところで、テニス部員であるお前たちは顧問である私を「尊敬」しているだろうか。もしも、そんな思いを義務づけられているとでも考えているなら、「尊敬」などこちらから願い下げである。

そんなことを考えながら･････アメリカ人が「I respect him.」と言うときの respect は「その人を、自分に大切な何かを提供してくれる重要な存在と認めて、それに相応しい接し方（待遇）をする」というような意味にとらえるべきではないだろうか。

ではもう一度聞くが、お前たちは顧問である私を respect しているか？もちろんこの思いも無理やり義務づけられるべきものではない。しかし、テニス部という集団を考える上で、respect の思考形式は大切な意味を持っている。

それは顧問である私に限らないけれど、少なくとも自分より長い経験と高い見識を持っていると判断した人の言葉を、respect の思考形式で、いったん完全な形で受け入れるということである。受け入れた上で、その言葉をどう咀嚼（そしゃく）し（自分なりにかみ砕いて判断し）、それをどうプレーに活かすか（或いは、全く活かさないか）は、プレーヤー自身の問題である。しかし「respect の思考形式で受け入れ、咀嚼（そしゃく）する」というプロセスを抜きにして自分の判断だけを優先させてしまう者は、必ず“独りよがり”に陥る。自分が住んでいる小さな井戸の中の価値観から抜け出すことができないのだ。私は、これまで、そんな部員を何人見てきただろう･････。

一方で、例えば、試合中のコートの中で、プレーヤーは“王様”として君臨していなければならない。試合中に何度となく訪れる判断の機会で、プレーヤーが「自分の決定がどんな意志よりも勝る決定事項であること」を疑っていたら、決断力 determination というメンタリティは、決して育たないのだ。「このチャンスボールを俺は思いきりひっぱたきたいんだけど、先生なら『大事につなげ』って言うかなあ」などと迷っていたら、ロクなプレーはできないということである。